

Factors Conducive to Catch-Up Growth in Postoperative Jejunoileal Atresia Patients as Prognostic Markers of Outcome

メタデータ	言語: English 出版者: 公開日: 2016-03-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 澁谷, 聡一 メールアドレス: 所属:
URL	https://jair.repo.nii.ac.jp/records/2001876

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1733 号

Factors Conducive to Catch-Up Growth in Postoperative Jejunoileal Atresia Patients as Prognostic Markers of Outcome

(小腸閉鎖患者の予後指標としての術後体重増加に関連する因子の研究)

澁谷 聡一 (しぶや そういち)

博士 (医学)

論文審査結果の要旨

本論文は、先天性小腸閉鎖患者(以下本症)の術後体重増加(catch-up growth)に関連する因子についての研究である。日本人の性別年齢別標準体重との比較において \pm SD 以下から \pm SD 以上への術後体重増加を catch-up growth(CUG)と定義し、本症患者の術後体重を2年間に渡って調査した。その結果、1年以内の早期 CUG を認める M(+)群(13 例)、術後1年を経過してから CUG を認める M(-)CUG(+)群(11 例)、術後2年を経過しても CUG を認めない CUG(-)群(18 例)に分類できることが明らかになった。さらに、各群について在胎週数、出生体重、閉鎖部位、残存小腸長、経静脈栄養期間について比較を行い、CUG 関連因子を検討した。残存小腸長に関しては、①実際の残存小腸長(residual length)に加え、②在胎週数から期待される全小腸の長さ(predicted length)との比を RP 比[① / ②]として評価した。その結果、残存小腸長やその他の因子は術後 CUG との相関はなく、RP 比が CUG の有無に相関することが明らかになった。術後に RP 比が 70%以下の症例は有意に良好な CUG が得られにくいことから、RP 比を 70%以上に保つように小腸の切除範囲を考慮することの重要性が本研究結果より示唆されている。本論文は、本症術後患者における CUG の有無に、RP 比が最も相関することを初めて明らかにした臨床的に意義のある論文である。

よって、本論文は博士(医学)の学位を授与するに値するものと判定した。